

Title	リラダンにおける王権のテーマ(1)
Author(s)	小西, 博子
Citation	Gallia. 1997, 36, p. 17-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12620
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

リラダンにおける王権のテーマ（1）

小西博子

リラダン作品で繰り返しテーマとなる「王権」。初期の『イシス』や『モルガーマヌ』、ライフワークの『アクセル』、その他にもエキゾチックな短編「アズラエル」や「アケディッセリル女王」など王国を舞台にした作品は数多い。これらの作品に登場する様々な「王権」についてはあまり議論されていないように思われる。現在までのところ唯一このテーマをまとまった形で取り上げたと思われるアラン・ネリ氏は、リラダンにおける「王権」をテーマ別（「迫害される王権」、「古の王権」、「不在の王権」など）に分類し、リラダン固有のキーワード（「死」、「絶望」、「血」など）による分析を行って、この問題を論じている¹⁾。

さて、リラダンにとっての「王権」に取り組むに先立ち、「王権」とは何かを定義せねばなるまい。しかし、様々な地域、時代に生起消滅する王権について、なにがしかの普遍的な「王権論」を提出することは容易ではない。現在、王や王権に関する最も包括的な仮説を提示しているといえるのは、人類学や民族学の分野であろう。フレイザーを先駆者とするこれらの分野の研究者は、王権の起源あるいは展開について多くの議論を提出している。その視座は、王権を扱ったリラダンの作品群に通底するテーマの理解に役立つのではないだろうか。まず、リラダンの王権に関する考察の中で、空間的、時間的なローカル性を超えて共通する要素をまとめ、これらの学の王権論の射程内での説明を試みてみたい。その試みは、後に、リラダン自身の生きた国、時代の王権の現実と、彼にとっての「王権」を考える手がかりになると思われる。

I. 王権についての考察を含む作品

1. 「バラード」（後に「ポンピニャン氏に倣って」と改題。『処女詩集』所収）

事実上のデビュー作である「バラード」にすでに王権についての記述がみえる。

注：作品からの引用は、Villiers de l'Isle-Adam, *Œuvres complètes*, « Bibliothèque de la Pléiade », 1986, 2vol. を参照し、拙訳を使用した。なお各引用末尾に巻数・頁数のみ記した。

1) A.Néry, *Les Idées politiques et sociales de Villiers de l'Isle-Adam*, Diffusion Université Culture, 1984.

この詩は、イタリア人オルシーニによるナポレオン3世夫妻の暗殺未遂騒動を発端とした対仏及び対ナポレオン3世への英国内の厳しい論調に、「愛国者」リラダンが一矢報いようとした気負った若書である。さすがに翌年の『処女詩集』に再録したときには、大幅な削除を行っているが、共通する内容は以下のように要約できる。

1. ブルボン、ヴァロワ、ナポレオンなど政体の如何にかかわらず、その時代の旗が祖国を象徴し、互いに敵対した英雄たちも、その勇気ゆえに墓の中では同胞である。
2. 英国人はフランスを侮辱して、大ナポレオンの栄光を汚しているが、その眠りをさますな。
3. 王座（帝座）は人類虚栄の絶巔として流血や憎悪、苦悩を隠している。王座はあたかも柩である。

この最後の部分に注目しよう。最終的に『処女詩集』にも残した「王座=柩」の条の前に「ゆりかごのそばには剣が置いてあり、それが閃く日を待たねばならない」(I,p.61)とある。「ゆりかご」とは、当時まだ1-2歳だったナポレオン3世の皇太子(1856年生)を指すものと思われるが、「待たねばならぬ」とは「待てぬ」の反語ではなかろうか。この部分は、「バラード」では、「神よ、私たちの大義から高貴な少年が生まれる定めであったならば」(I,p.1037)となっていた。この削除された一節は、1846年に結婚したが後継者に恵まれぬシャンボール伯(アンリ5世)を擁立する正統王朝派の絶望を表すものに他ならない。「剣をとる高貴な少年」はその後彼の作品の中にもみ出現する。『イシス』、『モルガーヌ』と続く王権篡奪の物語は常にヒロイズムとペシミズムを従えていく。

2. 『イシス』

「高貴な少年」が「定め」によって女主人公チュリアの前には出現するところから、物語は始まる。チュリアは、「この少年を全人類の中で最も理想的に満ち足りた人間にする」(I,p.192)という使命を自らに課することによって、自殺願望から解放され、死から生へと、倦怠から感動へと生きる意欲を取り戻していく。使命とはこの少年に「王杖を、なぐさみものを、輝かしい王冠を、権力を、恋を、若さを、狂おしい戦慄を、すなわち、生者のうちで最も大きく恵まれた分け前を与える」(I,p.192)というものであった。王権掌握後はイタリアから地中海全域へ、さらに全世界へと拡がる物質・精神両世界に亘る支配権をめざすことがほのめかされているが、続篇は失われ、未完に終わっている。

3. 『モルガーヌ』(後に『王位要求者』と改題)

『イシス』の戯曲版ともいえる『モルガーヌ』では、結末に王位転覆の不首尾と死が待ち受ける。戯曲のため、『イシス』のような哲学的ディグレッションはな

いが、フランス革命直後のイタリアを舞台に、共謀者の貴族たちの言葉に興味深い政治的考察が見られる。王位転覆を立身出世や冒険の機会ととらえる貴族たちの中で、リッチという貴族は、「無能な王に統治させることこそ王道に反し」、「歴史上、しばしば名門の人々は、王道の原理のためには世襲の原理を犠牲にすることも辞さなかった。」(I,p.286)と述べて、篡奪を正当化する。しかし懐疑的なモンテチェルリは、「今の君主制以上に、転覆後に私たちが立てる君主制を信じているというわけではない。」(I,p.286)と発言して、一同を驚かせる。彼は、「私たちの仕事の栄誉と持続について幻想を抱くには及ばない。かつては私たちの基本原理であった主義主張は、今後は王にも貴族にも民衆にも真面目に受け取られなくなっている。私たちは止めることも方向を変えることもできない流れに押し流されている。」(I,p.288)と続ける。しかし、彼はフランスからの革命思想のうねりを指しているのではない。彼にとって、共和制をも含め、「こうしたあらゆる政府は、今日それらを揺るぎないものにするだけの十分な信念と信仰を欠いているので、樹立するや否や、等しく亡び去る運命にあるように思える」(I,p.289)からだ。「大義」がすでに存在しない以上、行動主義の原理——「行動する」、「範を示す」(I,p.287)——すなわち冷淡無関心から生じる麻痺状態や沈滞をかきまわし、ゆさぶりをかけること——に篡奪の動機、そして貴族の役割を見出そうとするのである。民衆にとっては「黄昏の人間」にすぎぬ貴族たちの手によるこの企ては、「旧世界の終末を挑発する」(I,p.288)こと、いわば自滅を覚悟の企てである。それは旧世界への逆説的な愛着——「王座の神聖な原理を思えば、朽ちた王座はむしろ粉々にくだいた方がよい」(I,p.288)——という美学に基づいているようだ。「その企てが恐ろしく、血腥く、異常なものになるとしても」、「この胸のむかつく倦怠の外へでて、生きていると感じるだろう。」(I,pp.288-289)とモンテチェルリは結んでいる。彼らが擁立するセルジウスとの運命的な出会いの中で「私の探していた大いなる剣」(I,p.264)とモルガーヌは確信する。「剣」にたとえられたこの青年の出自の正統性²⁾についてモンテチェルリは「たとえこの人物がただの貴族であり、自分の剣の他には何一つ権利をもたぬ人物であってもかまわない。一人の男が獅子の種族であるかどうかを知るのにその男の出生証書などいらぬ」(I,pp.289-290)と弁護する。

4. 「アズラエル」(後に「告知者」と改題。『残酷物語』所収)

『イシス』、『モルガーヌ』が王座をねらう側からみた「王権」の物語であるとしたら、「アズラエル」、「アケディッセルル女王」はすでに王座にある側からみた「王権」を描いているといえよう。「王座＝人類虚栄の絶巔」という等式を体現さ

2) 中世シチリアを治めた神聖ローマ帝国ホーエンシュタウフェン王朝最後の皇帝コンラッド5世の末裔と名乗っている。

せるのにソロモン王はどうってつけの人物はいまい。「雅歌」のソロモンは、「伝道の書」では「空の空なるかな、すべて空なり」と説いた。王杖が虚栄心を満たすものでしかないことを悟っており、「智者もまた愚者と同じく死を免れないこと」を教える。「解脱直前で迷いにとらわれる道士」はリラダンがよくとりあげるテーマであるが、この短篇でも、自ら死を望んでいながら、いざ死の天使アズラエルの出現に恐怖し逃げまどう老道士を主題に据えている。しかし、リラダンが想を得たと思われるタルムードからの伝説では、「何人も宿命を逃れない」という教訓は共通ながら、死の天使をおそれるのはソロモンの王子になっている³⁾。全智全能に近いソロモンも宿命を逃れられぬことが栄耀栄華と対比される。

5. 「アケディッセリル女王」(『至上の愛』所収)

描写、語彙ともに、『サランボー』を意識したこの作品では、王者アケディッセリルの感情——苦悩や怒り、悲しみ——が後半の主題となっている。女王は亡夫の弟を幽閉監禁して王位を篡奪した過去をもつため、王位をねらう側、王位にある側、双方の立場を体験している。羊飼いの娘だったアケディッセリルは王位継承者である王子に見初められて妃となるが、徐々に権力に目覚め、夫の病死後は王権掌握の計画を胸に抱くまでになる。国王の死後、王位継承するはずであった義弟を、その婚約者ともどもとらえて権力を掌中にする。しかし、まだ若いその王子が女王を怨むどころか、「王者の心労を背負わずにすんだことを宿命に感謝し」、女王ならば「その輝きを一目見ただけで顔色を変えるような最高の栄冠を取るに足らぬものとし」、「彼にとっては婚約者こそがただ一つの王国である」こと(II, pp. 115-116)に女王は心動かされる。さらに二人が完璧なリーベス・トートのうちに死んでいった姿を見て、「権力に伴う憂愁、夢の美しさを忘れねばならない義務、過ぎ去った恋との別れ」など「栄光のもたらすあらゆる奴隷的束縛」(II, p. 126)を嘆きつつ、「王家の崇高な血統が断絶した」(II, p. 127)と臣民に告げる。

6. 『アクセル』

王権のもつ富と権力が、「黄金」という言葉によって象徴される。「若さ、自由、めくるめくような力、擁護すべき大義」(II, p. 671)——いわばチュリアがウィルヘルムに与えようとした「生者のうちで最も大きく恵まれた分け前」(『イシス』)——を掌中にしたサラは、外界にでて夢を実現しようとアクセルを誘うが、アクセルは「その夢を実現してどうしようというのだ。そのように美しい夢を！」(II, p. 671)と拒む。「未知の王者」として至高の権力を手にした瞬間の内的昂揚こそ、王権獲得の本質であり、事実上の権力の行使、富の享受は副次的なもの、

3) Villiers de l'Isle-Adam, *Contes cruels*, Corti, 1956, p.309.

いが、フランス革命直後のイタリアを舞台に、共謀者の貴族たちの言葉に興味深い政治的考察が見られる。王位転覆を立身出世や冒険の機会ととらえる貴族たちの中で、リッチという貴族は、「無能な王に統治させることこそ王道に反し」、「歴史上、しばしば名門の人々は、王道の原理のためには世襲の原理を犠牲にすることも辞さなかった。」(I,p.286)と述べて、篡奪を正当化する。しかし懐疑的なモンテチェルリは、「今の君主制以上に、転覆後に私たちが立てる君主制を信じているというわけではない。」(I,p.286)と発言して、一同を驚かせる。彼は、「私たちの仕事の栄誉と持続について幻想を抱くには及ばない。かつては私たちの基本原理であった主義主張は、今後は王にも貴族にも民衆にも真面目に受け取られなくなっている。私たちは止めることも方向を変えることもできない流れに押し流されている。」(I,p.288)と続ける。しかし、彼はフランスからの革命思想のうねりを指しているのではない。彼にとって、共和制をも含め、「こうしたあらゆる政府は、今日それらを揺るぎないものにするだけの十分な信念と信仰を欠いているので、樹立するや否や、等しく亡び去る運命にあるように思える」(I,p.289)からだ。「大義」がすでに存在しない以上、行動主義の原理——「行動する」、「範を示す」(I,p.287)——すなわち冷淡無関心から生じる麻痺状態や沈滞をかきまわし、ゆさぶりをかけること——に篡奪の動機、そして貴族の役割を見出そうとするのである。民衆にとっては「黄昏の人間」にすぎぬ貴族たちの手によるこの企ては、「旧世界の終末を挑発する」(I,p.288)こと、いわば自滅を覚悟の企てである。それは旧世界への逆説的な愛着——「王座の神聖な原理を思えば、朽ちた王座はむしろ粉々にくだいた方がよい」(I,p.288)——という美学に基づいているようだ。「その企てが恐ろしく、血腥く、異常なものになるとしても」、「この胸のむかつく倦怠の外へでて、生きていると感じるだろう。」(I,pp.288-289)とモンテチェルリは結んでいる。彼らが擁立するセルジウスとの運命的な出会いの中で「私の探していた大いなる剣」(I,p.264)とモルガーヌは確信する。「剣」にたとえられたこの青年の出自の正統性²⁾についてモンテチェルリは「たとえこの人物がただの貴族であり、自分の剣の他には何一つ権利をもたぬ人物であってもかまわない。一人の男が獅子の種族であるかどうかを知るのにその男の出生証書などいらぬ」(I,pp.289-290)と弁護する。

4. 「アズラエル」(後に「告知者」と改題。『残酷物語』所収)

『イシス』、『モルガーヌ』が王座をねらう側からみた「王権」の物語であるとしたら、「アズラエル」、「アケディッセリル女王」はすでに王座にある側からみた「王権」を描いているといえよう。「王座＝人類虚栄の絶巔」という等式を体現さ

2) 中世シチリアを治めた神聖ローマ帝国ホーエンシュタウフェン王朝最後の皇帝コンラッド5世の末裔と名乗っている。

せるのにソロモン王はどうってつけの人物はいまい。「雅歌」のソロモンは、「伝道の書」では「空の空なるかな、すべて空なり」と説いた。王杖が虚栄心を満たすものでしかないことを悟っており、「智者もまた愚者と同じく死を免れないこと」を教える。「解脱直前で迷いとらわれる道士」はリラダンがよくとりあげるテーマであるが、この短篇でも、自ら死を望んでいながら、いざ死の天使アズラエルの出現に恐怖し逃げまどう老道士を主題に据えている。しかし、リラダンが想を得たと思われるタルムードからの伝説では、「何人も宿命を逃れない」という教訓は共通ながら、死の天使をおそれるのはソロモンの王子になっている³⁾。全智全能に近いソロモンも宿命を逃れられぬことが栄耀栄華と対比される。

5. 「アケディッセリル女王」(『至上の愛』所収)

描写、語彙ともに、『サランポー』を意識したこの作品では、王者アケディッセリルの感情——苦悩や怒り、悲しみ——が後半の主題となっている。女王は亡夫の弟を幽閉監禁して王位を篡奪した過去をもつため、王位をねらう側、王位にある側、双方の立場を体験している。羊飼いの娘だったアケディッセリルは王位継承者である王子に見初められて妃となるが、徐々に権力に目覚め、夫の病死後は王権掌握の計画を胸に抱くまでになる。国王の死後、王位継承するはずであった義弟を、その婚約者ともどもとらえて権力を掌中にする。しかし、まだ若いその王子が女王を怨むどころか、「王者の心労を背負わずにすんだことを宿命に感謝し」、女王ならば「その輝きを一目見ただけで顔色を変えるような最高の栄冠を取るに足らぬものとし」、「彼にとっては婚約者こそがただ一つの王国である」こと(II, pp. 115-116)に女王は心動かされる。さらに二人が完璧なリーベス・トートのうちに死んでいった姿を見て、「権力に伴う憂愁、夢の美しさを忘れねばならない義務、過ぎ去った恋との別れ」など「栄光のもたらすあらゆる奴隷的束縛」(II, p. 126)を嘆きつつ、「王家の崇高な血統が断絶した」(II, p. 127)と臣民に告げる。

6. 『アクセル』

王権のもつ富と権力が、「黄金」という言葉によって象徴される。「若さ、自由、めくるめくような力、擁護すべき大義」(II, p. 671)——いわばチュリアがウィルヘルムに与えようとした「生者のうちで最も大きく恵まれた分け前」(『イシス』)——を掌中にしたサラは、外界にでて夢を実現しようとアクセルを誘うが、アクセルは「その夢を実現してどうしようというのだ。そのように美しい夢を！」(II, p. 671)と拒む。「未知の王者」として至高の権力を手にした瞬間の内的昂揚こそ、王権獲得の本質であり、事実上の権力の行使、富の享受は副次的なもの、

3) Villiers de l'Isle-Adam, *Contes cruels*, Corti, 1956, p.309.

所詮日々色あせていく相対的なものに過ぎないと、アクセルはサラに説く。「アケディッセルル女王」の若き王子たちのように、この瞬間を死によって凍結することが、「黄金と恋」というアクセルに課せられた試練への彼の答え——「最後の選択」——となる。

以上、様々な王権に関するリラダンの考察をまとめてみよう。

1. 王権は、人類の現世的夢——権力と富をほしいままにする——の頂点に位置する。
2. しかし、王権はひとたびその座についたものにとって、しばしば空虚なもの、重荷とさえ感じられる。
3. 王権は、それでもなおそれを得ようとするものと守ろうとするものとの、血で血を洗う闘争を隠している。
4. 王権篡奪は、権勢欲の充足に限らず、時に、停滞している政治・社会に風穴を開け、その行為に燃焼することに生の意味を見出そうとするアナキーな志向を伴うことさえある。
5. 王権篡奪は、「剣をとること」、「獅子の種族であることを示すこと」のヒロイズムと篡奪の「栄誉と持続」の保証はないというペシミズムを同時に伴う。

チュリア、モルガーヌ、アケディッセルル、サラと続く女たちが夢見た人類虚栄の絶巔である王座は、セルジウス、モンテチェルリ、アクセルら男たちの剣の閃きに一瞬照らし出された後、暗闇へと消えてゆく。栄耀栄華そのものさえ色あせたものに見せるこの王権の光と闇のコントラスト。この宿命的な悲劇性の構図は、人類学や民族学の王権論によって説明されるのか、検討してみたい。

II. 人類学や民族学の王権論⁴⁾とリラダンの王権論との共通項

王座は権力と富の象徴となっているが、本来、王とは、単に他に支配と服従を強いる政治的権力を体現する専制主であったのではない⁵⁾。また、その政治的権力は必ずしも世襲によって保証されていたのでもない。フレイザーの『金枝篇』の冒頭に出てくる「ネミの森の王」の伝承は王の暗く孤独な姿を伝えている。そ

4) 以下を主に参照した。

赤坂憲雄、『異人論序説』筑摩書房、1992。『王と天皇』筑摩書房、1993。

山口昌男、『文化と両義性』岩波書店、1975。『文化人類学への招待』岩波書店、1982。

『天皇制の文化人類学』立風書房、1989。『道化の民俗学』筑摩書房、1993。

井本英一、『王権の神話』法政大学出版局、1990。

ホカート、『王権』橋本和也訳、人文書院、1986。

フレイザー、『金枝篇』永橋卓介訳、岩波書店、1951。

5) 王のもつ宗教的威力は、政治的権力と並んで重要な要素であるが、フレイザーのいわゆる神聖王権——祭司王や神なる王——の側面については本稿では論じない。

れによれば、初源の王は一回性で、「放浪する異人といういかがわしい出自をもち、先王の殺害又は追放によって王権を篡奪し、やがては新来の放浪者によって殺害ないし追放される」という存在であった。すなわち権力の継承にとっては、いわば「篡奪こそがむしろ正統性の原理」であったことや、オイディプス王、リア王などの物語は、この王権継承に固有の円環的構造に結びついていることなどが指摘される。「外来者である」という出自の不明性と、「死または放浪が待っている」という悲劇性が初源の王権を特徴づける。王権がはらむこの「異人性」・「外来性」は、「篡奪こそ正統性」の原理のゆえに「王殺し」という伝承を生む。初源はまさしく先王を殺す行為なしには成立しなかった王権は、次第に先王、あるいは先王の身代わりを生け贄として追放、殺害することによって国家や共同体の災厄や穢れを払おうとする浄化装置の役割をになうようになった。「王殺し」の主題は、一回性の王権から世襲の王権へと安定化していく過程でも、王のスケープ・ゴートとしての機能を様々な形で残している。例えば、王の血縁的分身である王子や偽王（モック・キング — 数日間王と等しい権力を与えられて後、殺害又は追放される）、あるいは宮廷道化などがこの機能を王に代わって果たすことになる。王権のはらむ「異人性」や「外来性」はこのスケープ・ゴートの機能への転化の一方で、即位儀礼における「死と再生のイニシエーション体験」や「王の資格授与の旅」 — 王子の艱難苦行の旅、潜伏 — というテーマへと変形していく。すなわち、外部からやってきた新王は、「土地の女性との結婚」 — 再生産力を取り込んで土地を得る — や「供儀」 — 殺害（=聖化）したものを受け取ることでシンボリックにたどる死と再生のプロセス — など、権力獲得のための外部から内部への移行を「儀礼」という形でたどることになる⁶⁾。あるいはまた「受難の王子」のモチーフ — 正統の王位継承者として生まれながらも王宮から逐われ、受難と流謫の末に王位を回復する — いわゆる「貴種流離譚」と呼ばれる様々な王子の流離譚のヴァリエーションとなって、初源の王権の「外来性」や「放浪性」を模倣、反復するのである。これらの王権にまつわる神話モチーフは、リラダンの作品に対しても解読装置として有効なのではないだろうか。

『イシス』では、高貴な生まれの青年ウイルヘルムは外国の出自をもち（=外来性）、イシス神殿を想起させる場所でチュリアと結ばれる（=土地の女性との結合による再生産力の獲得、あるいは即位儀礼としての死と再生のイニシエーション

6) 王権と土地を支配する女性原理との関わりは、ケルト神話などにも認められるようだ (cf. 田中仁彦、『ケルト神話と中世騎士物語』、中央公論社、p.74)。成年式などのイニシエーションと王権の即位式との対応は、ホカート『王権』に詳しい。

「王の即位式においては、二重の意味において死と再生が演じられるのです。一つは前王の死にはじまる社会の象徴的な死と、空位期間の設定、新王の即位による社会の再生で、もう一つは、個人のレベルにおける新しい王の候補の個人的な死と試練、即位式後の復活です。」(山口昌男、『文化人類学への招待』、pp.165-166)

ン)。「モルガーヌ」では同じく外国の王朝の末裔(=外来性・正統性)が国事犯として王命による監禁という艱難を経て、時機を得て王位の奪回を企てる(=王子の艱難、苦行の旅、潜伏)。一方、篡奪者以外の者にとっても、王の交替は「政治や社会の停滞を破ろうとする混沌や無秩序への志向を満たす」という意味をもつ。「モルガーヌ」の結末は、結局「永遠の流離=死」というまさに王子の流離譚特有の悲劇的軌跡をたどる。「流謫の王子が王朝を復興する伝承モチーフ」の背後に「王位継承の正統性をめぐる理念的な相克」が潜んでいるという指摘に注目しよう。「篡奪こそを王位継承における正統性の原理とみなす初源の王にまつわるアルカイックな観念」と「血縁や世襲に基づく王権の正統性の継承」という新しい理念とが并存し、ある種の葛藤を演じているというのである。セルジウスはまさしくこの相克を含んでいる⁷⁾。モンテチェルリのいう「獅子の種族云々」やリッチの「王道の原理は世襲の原理に優先する」という論理は、「王朝の創始者や英雄的な王は、しばしば血統よりも篡奪という手続きを経てこそその正統性が立証される」という王権の起源に基づく矛盾を反映しているといえよう。その他のモチーフとしては、「アズラエル」における腹心の老道士の死や「アケディッセルル女王」における前王朝の断絶(「インドの国がこの代償によって遂に泰平となり、その久遠の花を再び咲かせるように」II, pp.126-127)など、王子や後継者たちの死は、王に代わり彼らが王国のためにスケープ・ゴートの機能を果たしたものと解釈できる。ソロモンとアケディッセルルの孤独と憂愁は、他に支配と服従を強いる神にも近い存在でありながら、同時に王者は国家や共同体に属さぬ非人間的で、非日常的な存在であることを深く自覚するゆえであろう⁸⁾。血縁的、家系的

7) 「王権の正統性という観念が広く流通している場所では、新たな王権の篡奪者たちは自己の出自を自らが滅した王朝か、以前に統治したことのある王朝と関係づけるような系図の操作を行う。」(赤坂憲雄、『王と天皇』、p.49)セルジウス自身、自らの正統性を主張する。「王位は自ずから得られるものであって、求めて得られるものではない。私は王の前で私の名と私の古来の権利を明らかにしよう。」(『王位要求者』I, p.297)

8) 「人間の現世における支配の究極の形態、それは生きながらにして神に近づくことである。そのために人は、人間としての行為を演じつつ、人間であることを否定していかなければならぬ。何故ならば、そのような行為を通じてのみ特定の人間は他の人間とこれの間に画然たる区別を生ぜしめ、他の人間が容喙し得ない政治空間を自らの周囲に生起せしめうるからである。」(山口昌男、『王権の象徴性』、『人類学的思考』所収、p.219)

「洋の東西を問わず王侯または政治的指導者が飾りたてられ、儀礼的な荘重さに圍繞され、行列、凱旋等様々な演出が行われるのは、逆にこうした上昇運動の背後には、王殺しの伝承にみられるように、その反対の過程がちらついているからである。つまり権力の失墜と二重写しになっているからだと言えるかもしれません。いずれにしても、シェークスピアの王権劇が雄弁に語りかけたように、王権を通して権力の頂上に上り詰めたものには、身近な存在を身替わりの犠牲に立てるか、自らが、犠牲になるか、あるいは王権が潜在的に取り込んでいる狂気と同化するしかないと言えるかもしれません。」(山口昌男、『文化人類学への招待』、p.173)

「アズラエル」と「アケディッセルル女王」において凱旋の場面などことさらに荘厳さを強調した描写はこの二重写しを思わせる。遺稿断章「山の老翁」の主人公暗殺教団の祖ハッサン・イブン・サバーなども含め、これらの「高度の演技力、狂気すれすれの直感力や行動力の持ち主、つまりコントロールされた非理性を自らのものにしてしている指導者」(同上、p.169)

に固定する前の一回性の王の残像は、政治の象徴的宇宙全体に焼き付いているかのようである⁹⁾。

このように初源の王権継承に起源をもつ王の「異人性」や「スケープ・ゴート性」、そこから派生した「死と再生」や「王子の受難」が、リラダンの作品のこここでモチーフとして認められた。初期の『イシス』や『モルガーヌ』などの王権劇を限られた空間、限られた時間の中で内面化し、象徴劇の形で完成した結果が『アクセル』であると考えられる。『イシス』でのイニシエーションは王の即位と世界の再生を同時に演ずるものであったが、『イシス』の続篇は、「統治」、さらにその次のサイクルの「死と再生」、すなわち「王の死または追放」へと円環的構造をたどるはずだったのかもしれない¹⁰⁾。しかし、リラダンも「最後の選択」をした。その円環構造をアクセルの城でのたった一夜に凝縮したのである。「栄誉と持続」の保証がない「王権」——人類虚栄の絶巔——を「その輝きを一目見ただけで顔色を変えるような最高の栄冠」を戴いた瞬間に凍結したのである。

(鳥取大学非常勤講師)

は、「至高のもののスケープ・ゴート化」(同上、p.173)に気づいているといえる。「指導者は自らの行き先を知らない。だから、自分が率いている者たちが足下に踏みしめる道の土ほこりほどのものなのだ。」(「山の老翁」II, p.982)

- 9) 山口昌男氏やケネス・パークの指摘するように、秩序は反秩序(混沌)と相互規定的であり、対をなしてはじめてその存在が確かなものになる(cf.『文化と両義性』、pp.36-37、『文化人類学への招待』、pp.168-174)。王制に限らず、制度的、象徴的に制度の中心を支えている為政者は、時として血祭りにあげられる。制度は入れ替わることを期待されており、社会的にも個人的にも「死と再生」を体験したいという人間の心性に潜むこの願望が政治の原理を動かす一つのファクターとなっているのである。
- 10) 『イシス』に、シャルル・カン(カール5世)への言及があるが、ここではスペイン王にしてドイツ皇帝であり、普遍的君主制の野望を抱いたこの人物が、最後はスペインのイエズス会修道院に隠退したことが記されている。このエピソードは歴史上の王権の「統治」の一例を示しているが、『イシス』の「続篇」の展開に一つの仮定を与えている。